

河環研だより

No.6
'08. 3月10日

特集 採卵方法等再点検!!

マス類養殖において採卵作業等の技術は、これまでに多くの手法が提案、実用化されています。それぞれの技術には注意点があり、それらを考慮した上で作業を行う必要があります。そこで、本年度は県内のマス類養殖場において、採卵作業の現状について聞き取り調査を行いました。

採卵間隔	2～10日
採卵時麻酔	オイゲノール製剤 (FA-100)、ニジマス・イワナで5名使用
親魚の水切り	有り16名、無し2名
採卵方法	アマゴ・ヤマメ：切開採卵法、一部搾出法 ニジマス・イワナ：搾出法
受精方法	等調液洗卵法12名、乾導法4名、炭酸水素ナトリウム法3名（2方法を併用している人1名あり）
受精までの時間	30分以内
ふ化槽の種類	縦型ふ化槽16名、円筒型ふ化槽5名（2種類を併用している人あり）
水カビ対策	魚卵消毒剤「パイセス」7名、その他3名、対策無し8名
発眼卵のふ化盆収容量	約3,000粒以下14名、約4,000粒3名、約5,500粒1名

皆さんの行っている採卵方法は概ね良好でしたが、一部注意すべき点がありましたので、下記にまとめます。

採卵間隔：高い発生成績を得るためには、週に一度は採卵するのが望ましい。

採卵前処理：親魚に付いた真水はよくふき取った方が方が良い。

水カビ対策：パイセスの処理を用法、用量どおり実施していない事例が見られました。水産用医薬品は用法、用量に従って適正な使用してください。

発眼卵のふ化盆収容量：30×45cmのふ化盆で約3,000粒以下が望ましい。

平成19年度研究成果発表会開催

平成20年2月7、8日の両日に研究所の研究成果発表会を各務原市と下呂市で開催し、両日で128名の方に出席いただきました。今回の発表会は「人とさかなの共生を考える」というテーマで8課題を「健全な水域環境をみざす新たな取り組み」、「効果的な放流をさぐる」、「環境にやさしい養殖」の3つのセッションに分けて発表しました。特に発表課題の「水生生物に関する教育活動への取り組み」に関して、近年、重

要視されている小学生等への環境教育の取り組みは学校、漁業協同組合、県の機関等の協働体制をいかに整え、取り組むかが重要であると改めて確認しました。



発表風景

当所研究員が2つの賞を受賞

日本陸水学会学会賞受賞

第72回日本陸水学会水戸大会において、英文誌「Limnology」に発表された研究論文「Drift patterns of particulate matter and organisms during artificial high flows in a large experimental channel」の第一筆者である望月聖子主任研究員が、第9回日本陸水学会賞（吉村賞）を受賞しました。この日本陸水学会賞は、陸水研究において、新しい知見を示しかつ優れた論文の第一著者が選考されるものです。

今回受賞の研究論文では、中小規模の洪水中に流下する生物や粒状物質の時間的変化パターンを数分単位で明らかにしています。さらに、それらの流下量を左右する要因として洪水前の安定期の長さ、水生植物、生物の持つ形態的特徴などが関係していることを示しています。これらは初めて得られた知見であり、今後陸水学の分野での活用が大いに期待できることが評価され、受賞につながりました。



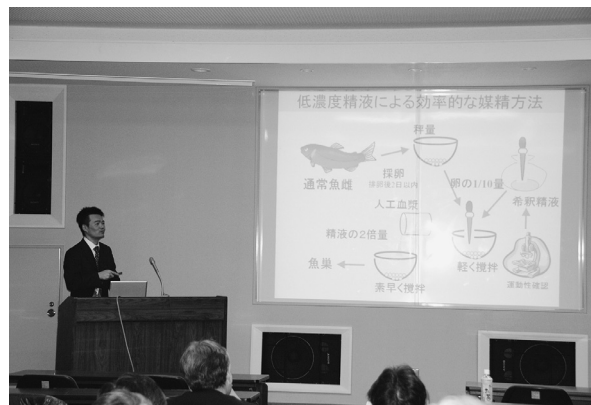
受賞式で記念品を受け取る望月主任研究員

全国水産試験場会会長賞受賞

桑田知宣専門研究員が取り組んできた「全雌アユ種苗の生産技術」が、平成19年度全国水産試験場長会会長賞を受賞しました。この技術については「淡水研だよりNo.2」（平成15年4月1日付け）で紹介していますが、その後もこの技術を実用化するための研究を続けてきました。全雌アユは、雌を雄に性転換させ、その精液を卵に媒精することにより作ることが出来ますが、当所はこの精液を民間のアユ種苗生産業者に供給し、共同で全雌アユの量産化について検討してきました。その結果、そのアユ種苗生産業者において1千万尾以上の全雌アユふ化仔魚の生産が可能となり、それを用いて子持ちアユを効率的に生産出来るようになりました。

この技術は、染色体操作を使わないで雌を雄に性転換させる方法であること、その技術が民間業者において実用化できることまで確認したことなどが評価され、今回の受賞となりました。

なお当所では、平成20年度より性転換雄アユの精液を岐阜県池中養殖漁業協同組合を通して販売する予定です。



受賞講演する桑田専門研究員